

開講!

IUJ むすびばカレッジ

国際大学（IUJ: International University of Japan）は南魚沼市に所在する大学院大学です。国際関係学研究科と国際経営学研究科の2研究科で構成され、授業はすべて英語で実施。世界60ヵ国から380名の学生が集まり共に勉学に励んでいます。教員の多くは欧米大学院で博士号を取得しており、国際的な実務経験を経て国際大学（IUJ）で教鞭をとる教員もいます。

2023年1月より新たに開始する「IUJむすびばカレッジ」は、国際大学（IUJ）の教員がそれぞれの専門分野から地域のみなさまにご関心いただける内容をお話する機会といたします。『国際大学って聞いたことあるけど、何を教えている大学かよくわからない』『どんな先生が教えているんだろう?』といった疑問を持たれている方が多いのではないのでしょうか。カジュアルな雰囲気でおこないますので、ぜひ気軽にご参加ください。

時期 毎月第3土曜日 15:30～17:00（開場15:15）

会場 南魚沼市事業創発拠点 MUSUBI-BA（JR上越線六日町駅東口1F）

※お車でお越しの場合は、南魚沼市役所駐車場をご利用ください。

費用 無料

定員 30名

対象 関心のある方はどなたでも歓迎（高校生、大学生、社会人など）

申込 下記よりお申込みください

開催予定

1月

21日⊕

「ポーランドからの手紙

—1989年から今のウクライナを考える—

スピーカー：伊丹 敬之 学長

オープニング挨拶：南魚沼市 林市長

ドリンク・スイーツを
ご用意いたします



2月

18日⊕

「戦略」からみるウクライナの不思議

スピーカー：山口 昇 教授



※3月以降も実施を予定しております。

主催：国際大学

共催：南魚沼市

問い合わせ先：

国際大学

スーパーグローバル大学推進・地域連携室

（Eメール）sgu@iuj.ac.jp

（電話）025-779-1459

参加申込方法

●ウェブサイトからお申込み

<https://www.iuj.ac.jp/jp/sgu-event-musubibacollege/>

●電話にてお申込み

*次回実施分を前日まで受け付けています。



1月

「ポーランドからの手紙ー 1989年から今のウクライナを考えるー」

スピーカー：伊丹 敬之学長

概要

2022年からのロシア侵攻によるウクライナ国民の悲劇は、ロシアの崩壊・衰退の第二幕でもある。第一幕は、1989年のポーランドでの連帯政権の発足、ベルリンの壁の崩壊の果ての、1991年のソ連邦の崩壊である。

私は偶然に、1989年のポーランドに紛れ込み、共産主義の崩壊をこの目で見た。この経験は伊丹家にも巨大なインパクトを与え、結局、私の次男はポーランドに留学し、ポーランド人女性と結婚した。その女性のお母さんの家族は、むかしウクライナに住んでいた人たちだった。

そんな個人的体験をまじえ、ウクライナがどのような国か、ポーランドとどう違うのか。なぜ、ロシアの侵攻後に数百万人のウクライナ人がポーランドに避難したのか、などをお話したい。

伊丹 敬之 (いたみ ひろゆき)

国際大学学長。

1945年愛媛県生まれ。1967年一橋大学商学部卒業、1969年同大学院商学研究科修士課程修了、1972年カーネギー・メロン大学経営大学院博士課程修了 (Ph.D.) スタンフォード大学経営大学院客員准教授、一橋大学商学部教授・同学部長、商学研究科教授、東京理科大学イノベーション研究科教授、同研究科長等を歴任。2008年一橋大学名誉教授、2010年ブロッツワフ経済大学 (ポーランド) 名誉博士号。紫綬褒章 (2005年) 受章、宮中講書始の儀御進講者 (2009年) 日経・経済図書文化賞 (1978年)、経営科学文献賞 (1981年)、日経・経済図書文化賞 (1982年)、日本公認会計士協会中山MSC基金賞 (2002年) などを受賞。

現在在外役職 J F E ホールディングス株式会社、商船三井株式会社の社外監査役。2017年9月から現職。

2月

「「戦略」からみるウクライナの不思議」

スピーカー：山口 昇教授

概要

ウクライナ侵攻開始以来腑に落ちないことが多い。ロシアは何故このような挙にでたのか？ 強大なロシア軍に対してウクライナが善戦しているのは何故か？ 「10日でキーウ陥落、8月までにウクライナ併合」というロシアの目論みは見事に外れた。何故そのような誤算をしたのか？

このような疑問を解く上で見逃せない点がいくつかある。第一に指導者の個性だ。プーチンとゼレンスキー以外の指導者がロシアとウクライナを率いていたとすれば結末は異なると想像できる。第二に国際社会による支援の意義だ。2014年のクリミア併合以来、西側の支援は目覚ましく、兵器や技術の供与だけでなく訓練にも注力してきた。第三に核の影だ。ロシアの核使用という恐怖は拭えない。ウクライナで起きたことを反芻して、このような不思議の背景を考えてみる。

山口 昇 (やまぐち のぼる)

国際大学国際関係学研究科 教授。

1951年東京生まれ。防衛大学校卒業 (応用物理学専攻) 後、陸上自衛隊航空操縦士として勤務。1988年 Fletcher 法律外交大学院修士課程修了。1991年～1992年、ハーバード大学オリン戦略研究所客員研究員。在米大使館防衛駐在官、陸上自衛隊航空学校副校長、陸上自衛隊研究本部総合研究部長、防衛研究所副所長、陸上自衛隊研究本部長などを歴任した後、2008年12月退官 (陸将)。2009年4月～2015年3月防衛大学校教授。2013年3月から9月まで東日本大震災対応のため内閣官房参与 (危機管理担当) を兼務。2012年4月から2015年3月まで政策研究大学院大学連携教授。2015年4月から現職。